

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520584
研究課題名(和文) 日本中世禅宗の仏事法会と中国仏教
研究課題名(英文) The service of Zen Buddhism and the relation of the Chinese Buddhism to Japanese medieval times

研究代表者
原田 正俊 (HARADA MASATOSHI)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：40278883

研究成果の概要(和文)：本研究においては禅宗が日本の中世社会にもたらした制度・仏事法会・思想の影響を多角的に解明した。禅宗は14世紀半ば日本社会において国家的な保護を受けて天台宗・真言宗とならぶ勢力基盤を確立した。禅宗がおこなう中国仏教の儀礼にもとづく法会は将軍の葬礼をはじめとして国家的仏事として定着した。思想面では禅僧による活発な講義が行われ禅と儒学が説かれ、禅思想は謡曲のような芸能にも多大の影響を与えた。

研究成果の概要(英文)：The influence of the system, the Buddhist service, and thought which Zen Buddhism brought to Japanese medieval-times society in this research was solved on many sides. Zen Buddhism established the power base located in a line with the Tendai sect of Buddhism and the Shingon sect in response to national protection about the middle of the 14th century in Japanese society. The Buddhist service based on the courtesy of the Chinese Buddhism which Zen Buddhism performs was established as national Buddhist services including a general's funeral service. In the thought side, the active lecture by a Zen monk was performed, Zen and Confucianism were explained, and Zen thought had great influence also on entertainments like NO play.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世仏教・禅宗・中国仏教・法会

1. 研究開始当初の背景

日本の中世仏教史研究は豊富な研究を積み重ねてきた分野ではあるが、一国史的な国内での思想や宗派の展開や国家と仏教の関係性の解明に主眼が置かれてきた傾向がある。

日本中世においては宋・元・明との往来は活発であり、近年の対外交渉史研究の進展からその実態はかなり明らかになってきている。しかし、こうした交流がどのような形で日本の中世仏教に影響を与えたかは十分に議論されてきているとはいえない。

中世仏教の中でも禅宗は中国の宋・元・明時代の中国仏教の影響を大きく受けたものとして知られている。これまでの研究史では鎌倉時代末に来日した渡来僧の活動や日本から求法のため大陸に渡った禅僧達の事績を中心にその解明が進んできた。しかし、禅宗史といった宗派史の枠組みを超えることはできず、中国の禅宗の直輸入の時代、和様化していく時代といった変化を明らかにしているにすぎない。

こうした視角からは日本の中世仏教全体の枠組みの変化や日本の諸宗派間相互の影響などを明らかにすることはできていない。また、対外交渉の活発化による日本仏教の変質を解明するにはいたっていない。

中国仏教の日本中世仏教の影響については仏事法会の在り方やそれまでの顕密諸宗との対比などもこれまで十分配慮が払われているわけではなく、こうした儀礼体系の面での分析も必要である。

また、大陸との往来の活発化に伴い仏具・書画などの大量の輸入があったわけでありこうした唐物が持つ仏教史的意味の考察も必要である。

2. 研究の目的

本研究においては以下の問題点を中心に研究を進めていった。

(1) 日本の中世社会が中国仏教の影響を大きく受ける禅宗をどのような形で受容していくのかを明らかにする。また、日本中世の公武政権が国家的に禅宗をどう位置づけていくかを解明する。

(2) 禅宗がもたらした大陸風の制度がいかなる理由で日本の公武政権や社会に受け入れられていくのか。またこうした制度を受け入れる内在的な要因を明らかにする。さらにその変容過程を考察する。

(3) 禅宗がもたらした仏事法会が日本社会でいかなる意味を持って受容されていったかを明らかにする。日本の中世社会においては顕密諸宗の執行する仏事法会が国家的法会として古代末以来、定着しているが、こうした体制が禅宗の展開によってどう変化していくかを追求し室町仏教体制の内実を明

らかにしてしていく。

(4) 鎌倉時代末から室町時代において禅僧がもたらした大陸情報の影響力は大きく、禅思想のみならず儒教・文学・医学など多方面に及んだ。こうした禅僧による大陸文化紹介の実態を明らかにしていく。

(5) 南北朝・室町時代の文化に禅宗は多大の影響を及ぼしたことはこれまでも指摘される場所である。しかし、顕密諸宗もまた仏教の主流派として大きな影響力を持っており、こうした室町時代の仏教体制が室町時代の文化にどのような形で反映されていくのかを明らかにする。

3. 研究の方法

主として日本中世の古文書・日記・五山文学の作品などこれまで公刊されている史料のなかから上記研究目的に合致するものを収集・分析するとともに、南禅寺・相国寺・天龍寺などの五山で行われていた法会・生活の運用規定である「清規」を収集していく。

これらは中国仏教がどのように日本に採り入れられたかを見る上でも重要なものであり、「勅修百丈清規」など中国元代の禅林で行われていた法会や日常規範がどのように日本で変容し定着していったかを見る上でも興味深い史料群である。これら未刊行の「清規」を収集していく。

仏事法会については使用する仏具・衣・袈裟・荘厳具などの検討も必要である。現在中国・台湾・韓国で使用されている仏具などの現地調査も行い、日本の仏具などの対比、これらを中世の清規などの文献史料と照合して検討することも必要である。また、日本の各寺院での伝世品も注目して史料としての活用を図る。

仏事法会や衣・袈裟・仏具などについては日本の絵画史料はもとより、中国の石窟寺院の壁画なども参考とする。

さらに室町時代には禅僧の墨蹟・頂相・絵画・禅宗典籍などが寺院はもとより将軍邸・上級武士の邸宅に多数所蔵された。美術作品は東山御物に代表されるように伝世品があり、こうした美術作品も視野に入れて調査していく。

以上のような方法を踏まえて、日本中世における禅宗の仏事法会を通して中国仏教の日本社会への影響を明らかにしていく。

4. 研究成果

史料調査についてはまず京都南禅寺の調査を行った。南禅寺は度重なる火災・戦火によって、のこされた中世文書は限定されているが、今回原本調査をすることにより伝来文書の全容を把握した。南禅寺文書はこれまで活字化されて公刊されているが、原本調査によってこの時期の禅宗文書の特色を再確認

することできた。また、南禅寺に関係する清規を収集した。

あわせて京都天龍寺・相国寺の調査を継続して行った。天龍寺から流出した古文書の収集に努め、国文学研究資料館・東京大学史料編纂所・尼崎市教育委員会・京都国立博物館において調査を行った。

仏事法会関係ではまず中世おける葬礼に禅宗が大きく関与していることを実証的に追求し、特に鎌倉時代後期の北条得宗の葬礼に始まり、足利歴代将軍、南北朝期の天皇といった国王の葬礼を禅宗が主に担当することを明らかにした。この成果は韓国東国大学で開催された学会で報告した。

東国大学は韓国曹溪宗に関係する大学であり、曹溪宗関係の研究者とも意見交換した。高麗・朝鮮王朝時代の仏教儀礼研究はいくつかあるが、日本においては、禅宗によって葬礼が重要な国家的法会として、国王の葬礼として執行されたことは東アジアのなかでも特殊な展開といえることが注目された。

韓国における高麗・朝鮮仏教研究者からも、こうした研究成果に学び、相互に仏教法会の社会的位置付けを研究することの必要性が述べられた。

禅宗が葬礼という死にまつわる儀礼に大きく関与することは当然、日本人の死生観についても中国仏教の影響が大きい。南北朝の戦乱のなか浄土教にもと最後の十念（念仏）を唱える武士や公家も多かったが、禅僧に師事して死に立ち向かう心構えを聞き、禅僧の如く最後の心中を詩文に表す遺偈を唱える武士や公家たちもこの時期増加することを明らかにした（図書①）。浄土教的な往生への願いと、禅宗的な死の迎え方がどのように日本社会で展開していくかといった死生観の問題は今後も追求していく必要がある。

論文⑦においては京都・鎌倉五山にのこる鎌倉時代最末期から南北朝時代の官宣旨・太政官符・太政官牒に注目し分析を行った。これらの文書はこれまで個別では知られるものであったが、五山禅宗寺院全体の問題としてとらえられることはなかった。この時期にこうした朝廷から大仰な公式様文書が次々と出されることには大きな歴史的意義があり、これらの文書発給によって、14世紀に五山官寺が公家・武家ともに承認する国家的な位置付けを確立したといえる。

これまで漠然と五山制の導入といったことが言われていたが、中国南宋・元の仏教体制を参考にしながら、禅僧達と北条得宗、室町将軍の政策基調の継承のもと五山が文字通り官寺として確立するのである。また、この間にある建武政権が後醍醐天皇主導のもと五山を国家的に認知しようとしていた政策基調は大きい。

また、法会についても将軍の葬礼をはじめ

天災に対する祈祷、飢饉の際に執行される施餓鬼など中国の禅林で行われていた各種の法会が日本に定着し、国家的法会として催されたことを明らかにした。中国禅林の行う法会以上に日本の禅宗が行う法会は社会的な比重が大きく、14世紀以降の日本社会において禅宗が行う法会がいかに重要であったかが明らかになった。

図書②論文においては禅宗寺院の伽藍・境致を詳細に分析し、清規がいかに伽藍とその機能に反映しているかを論じ、また日本における変容の過程を明らかにした。境致については中国禅林はもとより、日本、琉球に同様の景観が形成されていったことがわかる。14世紀から16世紀にかけて、東アジアにおける仏教のあり方がきわめて共通の要素を持って整備されていたことは注目される。

宋代以来の中国禅林では各種の清規が制定され、こうした各種の清規はモンゴル朝において「勅修百丈清規」として統合される。これら清規の日本への影響は大きく鎌倉時代以来次々と清規が日本で紹介され、寺院内の生活規範が改められた。これは古代以来の顕密諸宗とは異なった寺院内組織・修道生活・儀礼体系をもったものであった。こうした清規の日本での浸透の過程と頂相の普及、儀式の広がりをも明確にしていった（論文④）

中国仏教の紹介のため日本の禅僧が行った講義の活動、対象について論じたのが論文⑤である。禅僧たちは京都・鎌倉をはじめとして上層武家に対して熱心に談義を行い、武士たちも大きな関心を寄せ、彼らの教養体系のなかに禅僧がもたらした禅思想・儒学思想が受容されていった。談義で解説される具体的な書物の傾向を分析し、日本での禅思想の展開を明らかにした。儒学については、中国での仏教と儒学の対抗関係を踏まえ、禅と儒学の教えの一致や禅宗が朱子学発展の基礎となることを巧みに説いていたことを指摘した。

こうした、禅宗の仏事法会の普及と談義の成果により、禅的な思想や禅語録中の言説は実に広範囲に広がっていった。こうした社会的動向を見るために能の演目内容を分析してその全体的な様相を明らかにした（論文⑥）。これによって室町時代に普及した仏教思想は顕密諸宗の大きな影響力のもと天台本覚論的な思潮がまず注目される。しかし、禅思想の影響を大きく受けた演目も多数出現し、禅思想が広範に広がっていたことが明らかになった。同時に時衆をはじめとした念仏信仰も注目される。能は芸能として公武の権力者はもとより庶民にいたるまで愛好されたことは周知のことであるが、天台や禅の思想が多様な社会階層に普及していたことは注目される。

以上のような研究成果は海外でも注目さ

れ、韓国・アメリカ合衆国・オランダの学会、シンポジウムでも研究報告を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 原田正俊「中世における禅宗の展開と地域社会」『歴史と地理 日本史の研究』226号、査読有1～13頁、2009年8月、
- ② 原田正俊「Nuns and Convents in Medieval Japan」『ACTA ASIATICA』97、査読有、57～73頁、2009年8月、
- ③ 原田正俊「日本仏教史のなかの五山禅宗」『中国—社会と文化』第24号、査読有、195～210頁、2009年7月、
- ④ 原田正俊「日本の禅宗と宋・元の仏教—生活規範と仏事法会—」『アジア遊学 日本と宋元の邂逅』122号、査読有、2009年5月、16～24頁、
- ⑤ 原田正俊「日本中世における禅僧の講義と室町文化」『東アジア文化交渉研究』第2号、査読有、2009年3月、31～45頁、
- ⑥ 原田正俊「室町仏教と芸能・談義」『芸能史研究』第183号、査読有、2008年10月、40～59頁
- ⑦ 原田正俊「中世仏教再編期としての14世紀」『日本史研究』540号、査読有、2007年8月、40～65頁

[学会発表] (計4件)

- ① 原田正俊「The Zen Buddhism and the unification government in early modern times」国際シンポジウム Perspectives on Religion and Ritual in Early Modern Japan Leiden University (オランダ) 2009年6月1・2日
- ② 原田正俊「Monks of the Five Mountains and the Unification of Japan: Excerpts from Seisyo osho Bunan」国際研究集会

Pieces of Sengoku Princeton University (アメリカ合衆国) 2009年4月25・26日

- ③ 原田正俊「日本中世の禅宗と葬送儀礼」国際学会 第4回韓国仏教学結集大会 2008年5月17日～18日 於韓国ソウル市東国大学
- ④ 原田正俊「禅宗の尼寺と女性」国際シンポジウム 仏教学を越えて：日本仏教学の新しい方向 於アメリカ合衆国ハーバード大学 2007年11月2～3日

[図書] (計3件)

- ① 原田正俊「仏教と太平記」市沢哲編『太平記を読む』吉川弘文館、査読有、2008年11月、112～130頁、
- ② 原田正俊「五山禅僧の「文官」的性格」笠谷和比古編『公家と武家IV 官僚制と封建制の比較文明史的研究』、査読有、思文閣出版、2008年3月、139～158頁
- ③ 原田正俊「京都五山禅林の景観と機能」五味文彦等編『中世寺院 暴力と景観』、査読有 高志書院、2007年7月、247～270頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田正俊 (HARADA MASATOSHI)

関西大学文学部教授

研究者番号：40278883